

ライチョウ

神出鬼没の高山の鳥

南アルプスの最も高い地域をハイキングする途中、運が良ければ日本で最も珍しい鳥の一種を目にすることができます。南アルプスは世界で最も南に位置するライチョウの生息地です。ライチョウは「雷の鳥」という意味です。伝説によると、ライチョウは雷雨時によく姿を表し、人々を雷や火から守ってくれると言われていました。

キジ科の鳥であるライチョウは、小さなニワトリほどの大きさをしています。羽毛は、春から秋にかけて岩に溶け込むような斑模様になり、雪が降る冬が近づくと白くなります。

ライチョウは特に警戒心が強いわけではありませんが、ハイマツ (*Pinus pumila*) などの低木の下で暮らす習性と飛ぶよりも走る傾向のため、見つけるのが難しい鳥です。ライチョウを見るのに最も良い時期は、オスがメスを引きつけるため鳴き声をあげて飛ぶ初夏です。ただし、足元に雪が残っている時期は、経験豊富な登山者でなければ南アルプスの険しい山を登ってはいけません。

南アルプスは北半球でライチョウが見られる最南端の場所であるため、世界中の自然愛好者が南アルプスのライチョウたちに強い関心を寄せています。しかし、近年南アルプスのライチョウの数は減少しています。減少の原因が気候変動なのか、捕食なのか、侵入種の植物の存在なのか、またはその他の要因なのかを判断するための調査研究が進行中です。世界的には絶滅の危機にさらされているわけではありませんが、ライチョウは日本では国の特別天然記念物に指定されています。また、この南アルプスの大切な住民は、南アルプスユネスコエコパーク（生物圏保存地域）のシンボルであり、長野県、岐阜県および富山県の県鳥でもあります。